

おとこの秘図

襲撃

おとこの秘図ひず (一) 襲撃しゅうげき	昭和五十二年七月十五日 印刷 昭和五十二年七月二十日 発行	著者 池波正太郎いけなみ しょうたろう	発行者 佐藤亮一	発行所 株式会社 新潮社	郵便番号一六二 東京都新宿区矢来町七一 電話 業務部 〇三(〇六六) 五一一一 振替東京四・八〇八 編集部 〇三(〇六六) 五四一一	印刷所 二光印刷株式会社	製本所 新宿加藤製本株式会社	定価 九〇〇円
---	--	---	-----------------	---------------------	---	---------------------	-----------------------	----------------

© Shotaro Ikenami 1977 Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

襲	別	追
擊	離	想
一五九	六四	五

装 装
画 幀
・ 挿
繪
中 玉
井
一 ヒ
弥 ロ
テ
ル

おとこの秘図

(一)

襲
撃

追
想



筆者が数え年五歳の夏。亡父・富治郎と共に撮った一枚の写真が、いまでも残っている。

そのころの父は、日本橋小網町の綿糸問屋・小出商店の通い番頭で、白い麻の背広に白靴。ストロー・ハットという姿で、私は子供服に白い帽子だ。

このときの情景を、いまでも私は、微かにおもい起すことができる。

日本橋の高島屋に近い写真屋の中で、凝としていない私を、父があやなしてくれながら、写真機の前にすわらせた。

撮影が終り、外へ出て、電車に乗った。

大きな駅（上野駅）に着き、父が売店で、キャラメルを買ってくれた。

それから汽車に乗り、田舎の家へ帰った。

関東大震災で、浅草の家を焼かれた父母は、一時、埼玉県・浦和へ移り住み、父は汽車で東京の店へ通っていたのである。

私の、もっとも古い記憶は、およそ、このころからはじまっているようだ。

現代の浦和市からは、まるで想像もつかぬ田園風景の中で生まれた年から六年間をすごした、その生活は五十をこえた現在の私へ微妙に作用していることを、何かにつけて感じるができる。

人間の記憶が、およそ四、五歳のころからはじまるように、この年齢における生活は、その人の一生にぬきさしならぬ影響をおよぼすということだ。

そういえば……。

これから私が語りついで行く、この小説の主人公徳山五兵衛秀栄の生涯にも、同じことがいえるような気がしてならぬ。

徳山五兵衛の若いころの名は、権十郎である。

しばらくは、この名をもつて、彼をよぶことにしたい。

一

徳山権十郎の記憶は、先ず、あたたかい女の躰からはじまる。

それは、母の躰ではない。

母は、権十郎を生むや、たちまちに亡くなつてしまつたのだ。

このため、権十郎は、乳母の千によつて育てられた。

権十郎が成長してのち、幼時の追憶として、先ず脳裡に浮かんてくるのは、幼なかつた自分の顔や唇や、鼻や、裸の躰の其処此処を這いまわる千のくちびるや舌の感触なのであった。

五、六歳になつても、千は権十郎の添い寝をやめなかつた。

じつとりと汗ばんだ、そのぬめやかな肌の感触のころよさと、なまあたたかくて甘酸っぱい千の体臭も忘れされるものではない。

それは、後年の千とは、まったく別の女体だとしもおもわれぬ。

「若さま……ああ、可愛ゆい、可愛ゆい」

昂ぶつたささやきを権十郎の耳へふきこみ、自分の熱くて肥えた太股の中へ、細くて小さな権十郎の脚をはさみこみ、身をふるわせつつ、

「ああ、可愛ゆいこと。千は一生、若さまのおそばから、はなれませぬぞえ」

毎夜のごとく手指と口唇こうしんによる執拗しつような愛撫あいぶをつづけ、それが終つてのち、ようやく、子守唄で権十郎をねむらせてくれたものだ。

後年になつて、権十郎がおもうに、そのころの千は、女として、男そのものへの飢渴と、失つたわが子への愛のすべてを若さまの自分へ投げこんだとしか考えられぬ。

いずれにせよ、徳山権十郎の肉体は、女の生身なまみというものを……女体の肌の感觸にふや匂においや、口唇の味わいなどを赤児のときから六年もの間、絶えず吸収しつづけてきたことになる。

このため、彼の女体への官能は常人の二倍も三倍も早く、

「熟してしまつた……」

のではあるまいか。

乳母といつても、権十郎が生まれたときの千は、二十歳の若さであつた。

もっとも、昭和五十年のいまからさかのぼつて二百八十余年も前の時代の女としては、二人三人の子を生んでいてもふしぎはなかつた。

千は、二千二百四十石の大身旗本・徳山重俊の用人をつとめる柴田宗兵衛しばた そうべゑのむすめであつた。

十八歳の春に、千は、旗本・堀川兵庫かじがわ ひょうごの家来で、江原平三郎えはら へいざぶろうという者に嫁いだ。

ところが、夫の平三郎が病死した後に生まれた子を、さらにつづいて疫病で死なせてしまった。

まことに、不幸な女ではある。

その悲歎を背負つて、千は、徳山屋敷内の長屋に住む父のもとへ歸つて来た。

折しも……。

柴田父娘おやこの主家である徳山家にも、大事が起つた。

徳山重俊の側妾わきよ・お静しずが権十郎を生み落すや、激しい産褥熱さんじよくねつで亡くなつた。

「若さまは、わたくしが、お育ていたします」

いい出て、そのはち切れんばかりの乳房を権十郎にふくませたのであった。

千の乳房からは、あふれるように母乳が出た。

生まれ落ちたときは、見るからに、

「ひ弱そうな……」

権十郎だったが、それがのちに、外神田で心貫流しんぬきの剣術道場を構えていた窪田甚五郎くぼた じんご安照やすてるの門へ入り、その四天王なぞとよばれるほどの腕前になれたのも、千の母乳と、ひたむきな育みによるものといつてよい。

ところで……。

徳山権十郎の幼時の記憶の中で、千と同様に……というよりも、もっと別の強烈さで脳裡にやきついている「一日」がある。

まさに、その「一日」であった。

その一日の、その男の記憶である。

その男とは、その後も何度か会ってもい、言葉をかわしたこともあるが、何といつても、権十郎が五歳の早春の、あの一日のその男は、

「生涯忘れ得ぬ……」

ほどの印象をもって、権十郎の胸底へ、深くきざみこまれた。

ときに、元禄七年（二六九四年）二月十一日であった。

そして、その男の最後の顔を見たのは、八年後の元禄十五年の早春の或日である。

以前は、中山安兵衛なかやまやすべゑ応庸まさつねと名乗っていたその男は、

「堀部安兵衛武庸」

となっていた。

二

元禄七年二月十日のことを、権十郎も、はっきりとおぼえてはいない。

千の父で、徳山家の用人をつとめている柴田宗兵衛が、

「明日は、よいところへ御供をいたし、よいものをごらんにいれますゆえ、たのしみにおいでなされますよう」

と、いい、うれしがる五歳の権十郎へ、

「なれど若様。このことは、私めが、そつとお連れいたすのでござります。なれば、かまえて口外なされてはなりませんぬぞ」

念を入れたというのだが、それは、のちになって柴田用人から聞いたことだ。

おそらく権十郎は、無条件でうなずいたのであろう。

だれにもいわずに、

(爺と、よいところへ、何か見物に行く……)

というのだから、幼い権十郎にとって、たのしくないはずがない。

しかも、乳母が、

「千も、いっしょでござりますよ」

というではないか。

柴田宗兵衛は、出もどりのむすめが夢中になって育てている若様を、
「もったいないことだが、まるで、わが孫のように可愛しくてならぬ」

むすめの干に、洩もらしたそうな。

柴田父娘が権十郎へかける愛情には、生母を失った妾腹の幼児への憐れん憫びんが、ないまざっている。権十郎は、妾腹の子である。

父の徳山重俊は、正妻との間に一男二女をもうけていた。

そのうちの一女は早世したが、徳山家の跡つぎは、正妻が生んだ長男の右近うこんと決まっている。右近は、権十郎より十九の年長だし、二千二百四十石の跡をつぐべき身だという自負が、その言動にいちじるしい。

のちに、権十郎がこういつている。

「……あのころの義兄あに上が、おれを見る目つきは、まるで、捨猫あにでも見るようであった」
旗本の家に、側妾の一人や二人いることは、すこしもめずらしくない。

けれども、正妻が生んだ男子と、妾腹の男子とは、おのずから差別がある。

まして、父の徳山重俊は、権十郎の母に子を生ませたことを、悔くいていたふしがあった。

権十郎の生母・お静は、日本橋本石町ほんいしちょうの扇間屋・駿河屋すまがや又兵衛またべゑの次女に生まれ、徳山家へ侍女奉公に来ていた。

当時、商家のむすめが、しかるべき武家の屋敷へ、いわゆる行儀見習のため奉公に出るということは、のちのちの嫁入りのためにも、

「箔はくがつく……」

ことにもなるのだ。

さ、そこで、徳山重俊が侍女・お静へ手をつけたについては、

「もののはずみで……」

と、重俊自身が洩もらしたそうな。

なるほど、男と女が情をかわすことが、もののはずみでないことはない。

それにしても重俊の、この言葉には、唾を吐いて捨てるような忌いましさがふくまれていた。徳山重俊は、それこそ、

「謹厳剛正を絵に描いたような……」

人物だったというが、そのくせ保身の術には長じていたらしく、貞享三年（一六八六年）に家督して以来、幕府のおぼえもめでたく、御使番・御目付・盜賊改方などの諸役を歴任した。

わが屋敷にいるときは、笑顔ひとつ見せず、苦虫を噛みつぶしたような厳めしい顔をくずさず、（いったい、何がおもしろくて、父上は生きておられるのか……？）

権十郎は、ふしぎでならなかったものだ。

もつとも、老中・若年寄などという幕府・最高閣僚の前へ出たときの徳山重俊は、

「何事にも温厚篤実にして、しかも機敏に物事を察知し……」

と、評判が高かった。

（あの父上が……？）

権十郎は、呆氣にとられた。

屋敷にいるときのような父であつたなら、到底、目上の人びとの氣に入られるわけはないにしても、若いころの権十郎にとっては、実に想像もつかぬことだったのである。

そうした父が、もののはずみで、母に手をつけ、母が妊娠をしたので、

「やむなく……」

これを正式の側妾として屋敷内に部屋をあてえた。

（何故、母上はこのような父上のいいなりになったのだ）

それが、たまらなく口惜しかった。

何しろ、自分が生まれるやいなやに亡くなってしまった母へ、そのことを問いたですことはできない。

おそらく父・重俊が、勝手きわまる一瞬の欲情のままに、ちからずくで、母を屈服させたにちがいない。

侍女だった母が、一躍、主の側妾あるじとなって一年そこそこの月日を、どのように送ったかは、権十郎にもおよそおもいあたる。

徳山重俊は、はじめの妻が子を生まぬままに病歿したのち、三千石の旗本・神尾守勝かんおもりかつのむすめ・滝子たきこを後妻に迎えた。

長男の右近を生んだ正妻の滝子が、側妾・お静に対し、どのようなあつかいをしたか……。

それは、滝子が病歿したのち、権十郎へ乳母の千が洩らした言葉によっても察しられる。

「……それはもう、泪なみだのかわかぬ間とて、なかったそうでございますよ」

と、千はいった。

お静については、

「……まるで、いずこかのお姫さまのように上品な、人形のように可愛ゆらしく、お美しいお方でございました」

とても、町家のむすめとおもわれなかったという。

お静が亡くなったのち、徳山権十郎が、父の重俊にも、義理の兄や母にも、

「疎はなまれつくして……」

育ったことは、事実である。

主人たちが、そうした目で妾腹の子を見るからには、必然、家来たちもこれにならう。

用人の柴田宗兵衛父娘のみが、

「若さまは、おかawaiiそうに……」

と、権十郎への愛情が、さらに切実なものとなったのは、そうした事情があったからだ。はなしをもどそう。

柴田用人が、

「若様に、明日はよいものをごらんにいれましょう」

といった二月十日のことだが、柴田宗兵衛は前もって徳山重俊へ、十日から十一日にかけて、「お暇をいただきたく……」

と、願ひ出た。

早稲田馬場下町に屋敷がある高岩たかいわ小左衛門こざえもんの用人・井口半蔵の妻は、柴田宗兵衛の叔母にあたる。

この叔母が、かねてから宗兵衛に会いたいといつてよこしているので、

「叔母を見舞いがてら、権十郎様の御供をいたして、翌日は雑司ぞうしヶ谷やの鬼子母神きしもじんなどを、お見せ申したいと存じまする」

柴田用人は、このように申し出たのである。

井口半蔵夫妻の長屋へ一泊してのことだ。

徳山重俊は、まるで関心がないように、

「好きにいたせ」

こういったのみだ。

権十郎など、どこへ行こうと「知ったことではない」とでも、いいかげな口調であつた。

「さ、おゆるしが出ました。明日は、きっと、よいものをお見せいたしますぞ」

「よいものとは、なに？」